

第二の浪士
上

南條範夫



徳間文庫



だいさん ろうし
第三の浪士 上

© Norio Nanjō 1990

㊤ - 1 - 22

1990年1月15日 初刷

著者

なん じょう のり お
南 條 範 夫

発行者

あら い おさむ
荒 井 修

発行所

東京都港区新橋四一〇七一〇五
株式会社 徳間書店

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替 東京四一四四三九二番

製 印
本 刷

凸版印刷株式会社

編集担当 前島不二雄

ISBN4-19-568965-1 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

江苏工业学院图书馆

藏三書良章

目次

戦 闘	5
桑名城下	43
動乱の江戸	91
東海道	126
男の正体	177
抗 戦	211
彰義隊	258
敗 残	302
越後の戦火	354
小 萩	403

戦 闘

戦闘はすでに三日に亘^{わた}って継続していた。

前將軍徳川慶喜^{とくがわよしのぶ}の命を奉じて上京しようとする会津・桑名の兵と、それを阻止しようとする薩摩^{さつま}・長州の兵とが、正月三日午後五時ごろ、上鳥羽^{かみとば}で衝突したのが始まりである。

どちら側が先に発砲したのかわからない。どちらも、対手^{あいて}に先に攻撃されたから応戦したと主張している。

戦闘は夜十時ごろまで続き、会津桑名の兵は、霧に紛れて退却した。

翌四日は、伏見^{ふしみ}の町で、激戦が行なわれた。勝敗を決定したのは、火力である。薩長軍の臼^{きゆう}砲隊^{ほうたい}が大いに威力を発揮し、その鉄砲隊も、会桑軍よりも新式優秀の銃器に恵まれていた。会桑軍は、鳥羽街道でも伏見街道でも敗れ、淀町^{よどまち}に退却した。

そして、今日五日、戦闘の第三日を迎えたのである。

淀^{しりぞ}に退いた会津桑名の兵は、住民が逃げ出して空っぽになった民家にはいりこんで、簞笥^{たんす}や

戸板や畳を運び出し、夜半過ぎまでかかって、街道のあちらこちらに急造の防柵ぼうさくを拵こしらえた。間もなく夜が明ければ、敵が攻撃を開始するだろう。暗いうちは、弾丸だんがんを空費する事を怖おそれて撃つてこない。夜襲を警戒して、火をたいているのが望見できる。

冷たい風が、かなり強く吹いていた。

宇治川寄りの町外れに集まっていた桑名兵の中で、ひととき大柄な逞たくましい男が、焚火たきびの間を歩き回って誰かを探しているふうに見えたが、同じようにあたりを見回しながらやって来た中肉中背の男を見つけると、立ち止まった。

「おい、吉村——」

相手は、急いで近づいてきた。

「大谷——梅沢を見なかったか」

「いや、昏方くれがたから、一向に」

「あいつ、納所村なつしよで闘っていた時、堤から下に転げ落ちるのを見た、すぐに行ってみようとしたが、敵に斬きりかかられて——おれが行ってみた時には、もう姿が見えなかった。それっきり見ていないのだ」

「逃げているさ、あいつのことだ」

「それなら、ここにいないはずだ。もしかしたら、殺やられたのじゃないかな」

吉村杏四郎^{ききやうしろう}は、心配そうにいった。焚火の焰^{ほのお}が、ひそめた眉^{まゆ}と高い鼻梁^{びりやう}とを映し出している。大谷大作^{だいたくさく}の方は、わずか三日の間に、鼻下にも顎^{あご}にも、黒いひげが伸びている魁偉^{かいゐ}ともいうべき顔に、冷笑の色しか浮かべていない。

「戦場だ、殺られたとしても仕方がないさ。明日は、いや、今日にも、おれかお主かが殺されるかも知れん」

「しかし、おれはあいつの事を、加代^{かよ}に頼まれたのだ、抛^{ほう}ってはおけぬ」

「ふん、加代どのもよい許嫁^{いみなずけ}を持ったものだ、お守^もりがいなければ独り立ちできぬ婿^{むこ}どのとはなあ」

がやがや罵^{のの}り騒ぐ声がして、三人の見回り兵が一人の兵をこづき回しながらやってきた。

「どうしたのだ」

焚火の囲^{まわ}りにいた連中が立ち上がる。

「こいつ、あそこの民家にもぐり込んで、酒を盗み飲みして、寝込んでいたのだ」

酔いも醒^さめて蒼^{あお}くなっている奴^{やつ}を、つき飛ばした。

「おれたちが、疲れ切ったからだで、防柵^{ぼうさく}づくりに働いていた間、こいつめ、のうのうと——や、こいつ、金も盗んだらしい」

倒れた男の足もとに光ったものが見えた。

「ぶった斬れッ、桑名の面汚しだ」

「待て——」

杏四郎が、中にはいった。

「勝手なことをしてはいかん。隊長の処ところに連れて行って、処分を決めてもらえ」

見回り兵がその男を連れ去ると、杏四郎が、

「大谷、おれは、もう少し梅沢を探してみる。もしかしたら、傷ついて、どこかに倒れているかも知れん」

「危ないぞ、一人で出てゆくのは。あんな臆病者おくびょうもののために命を捨てるのはつまらん」

大作はそういったが、強いて止めようとしめない。杏四郎は、防柵の間をくぐりぬけて、納所村の方へ進んでいった。

冷たい月光の下、到いたるところに、昼間の戦闘の痕跡こんせきがみられた。

馬が斃たがれている。収容し残された死体がある。鉄砲や、槍やりや、刀や、破れた旗や、ちぎれた鎧よろいの一部や、弾薬箱などが散乱している。

杏四郎は、注意深くあたりを見回しつつ、

「梅沢——梅沢——保介やすすけ——保介」

と小声で呼びながら進んだ。転がっている死体には、近づいて、一々、顔を検あらためた。敵の陣

營の焚火がすぐ先に見え、敵兵の話し合っている声が聞こえてきた。

——これ以上進んでは危ない。

杏四郎は、来た時と反対に、桂川沿いかつらがわに戻ることにした。宇治川と桂川とに挟まれた地帯が、前日の激闘のあったところなのである。

「梅沢——保介——」

敵陣から遠ざかると、かなり大きな声で呼んでみた。加代が、自分と並んで、声を合わせて呼んでいるような気がした。

——あいつが万一、死んでいたりしたら、加代が、どんなに悲しむか。

幼い時から兄妹のようにして暮らしてきた又従妹またいとこの、小さな顔と大きな瞳ひとみが、闇やみの中に浮かび、やや甘えた声が耳もとに囁ささやいた。

——お兄さま、保介さまのことお願い。お兄さまはお強いんですもの、きっと保介さまを守って下さるわねえ。

——大丈夫だ、きっと無事に連れて戻る。

その時いった言葉をもう一度、呟つぶやいてみた。

砲弾で壊れた水車小屋があった。前日の夕刻、たしかにこの辺りで闘った記憶がある。その時は水車小屋は健在だった。

堤を降りて、小屋の方に行ってみた。中を覗いてみたが、めっちゃめっちゃに壊れているだけだ。月を仰いで立った。

「梅沢——保介——」

もう半ば諦めたような声で呼んでみた。と、水車小屋の中で、がたッと大きな音がする。はつと振り向いて身構えた時、

「吉村——」

べそを掻いたような声がした。奥の方のがらくたを押し分けると、蒼い顔をした男が悦びに声をふるわせて、

「吉村、よく、来てくれたなあ、ありがたい、助かった！」
といいながら、飛び出してきた。

「梅沢、無事だったのか」

「うむ、うむ、心細かった。ありがとう、吉村、ありがとう」

「いつから、ここに匿れていたのだ」

「昏方からだ。この小屋が砲弾でやられたのを見たから、この中にいれば、大丈夫だと思ったのだ」

「闘いはとっくに終わっている。なぜ、淀の味方の陣地にやって来なかったのだ。すぐあそこじ

やないか」

「夜半に、顔を出してみた。だが、淀の方の焚火が、味方のものか、敵のものかわからない、怖くて出てゆけなかった」

——処置なし、

といったように、杏四郎は肩をすくめた。

「行こう」

「吉村、おれは臆病者だ、笑ってくれ」

「お主は戦向きじゃない、剣よりも書物の方が好きな男なのだ、仕方がないさ」

「加代どのが、こんなおれを知ったら、きっと軽蔑するだろうなあ」

「誰もわざわざ告げ口はせん」

「しかし、大谷の奴は——」

「つまらぬ事をいうなど、おれが口止めしておく」

「あいつ、加代どこの事でおれを憎んでいる。きっとおれの事を悪しざまにいいふらすだろう」

「心配するな、おれがついている」

「ありがとう。でも、加代どのが、おれのこの臆病さを知ったらなあ」

「加代はお主の優れたところが、剣ではなく頭にある事を知っている。あれは勇氣よりも知恵を尊重する女だ。いつも、そういつていてはいないか」

「うむ、それはわかつていゝる。だが、どうしておれはこんなに意氣地がないのかな、怖くてたまらないのだ、こんな闘いがいつまでもつづくなら、武士などやめてしまいたいくらいだ」

「ばかッ、何をいう」

杏四郎が、声を鋭くして、一喝した。

味方の陣に近づいた。

「梅沢、左足の股をこれで縛れ」

杏四郎が、立ち止まって腹帯をとくと、保介にいった。

「え——足を？」

「股を負傷して倒れていたことにしろ」

杏四郎は、左の股をぐるぐるまきにした保介を、肩にかけて引きずるようにして、味方の陣に戻った。

「生きていたのか、坊や」

焚火の傍らで二、三人の兵に何か指図していた大作が大きな声をかけた。

「負傷して倒れていたのだ、梅沢、あちらに行つて少し休め」

杏四郎は、負傷者の收容所に当てられた民家の方へ、保介を連れて行く。

「吉村、今日も、夜があけたら闘いが始まるのだろう」

「むろんだ」

「おれのそばを離れないでくれ、頼む」

「なるべくそうするつもりだが、乱戦になれば、わからん。お主、かまわずに逃げろ」

「いやだ、佐々木隊長が、昨日も、逃げる奴は斬れといっていただろう」

佐々木只三郎は、京都見廻組頭みまわりぐみをやっていた旗本で、杏四郎たちの属する桑名兵は、このときその指揮下におかれていた。

「じゃ、なるべくおれのそばにいろ、だが、邪魔にならぬようにしてくれ」

情けない戦友を持ったものだと、杏四郎は内心苦笑した。

「妙な匂においがする」

保介が、鼻をくんくんさせた。確かに、何か肉の焦げるような匂いが、流れてきた。

「どうしたのかな」

杏四郎は、匂いのする方に走っていった。匂いは、大作を中心にして取り囲んでいる焚火の中心から流れてきている。

「何だ、これは」

杏四郎が、覗き込んだ。兜を逆さにして鍋の代用にし、その中で何かを煮ているらしい。

「うまそうな匂いだろう」

大作が髯づらを笑わせた。

「馬の肉だ」

「馬？ ひどいことをする」

「ばかいえ、こう腹が空いては、どうにもならん。何でも喰えるものは喰う方がいい。昔から赤斑牛の肉は精をつける薬用として用いられている。君侯が、いつそや、紀州侯から分けて貰って来られたと聞いた。牛が喰えるなら、馬でも喰えるはずだ」

匂いにつられて、大勢集まってきた。

「うまそうだな」

「おれは、いやだ、馬の肉など、異人じゃあるまいし、からだが穢れる」

「腹がへっては戦はできん、おれは喰う」

「どうする、お主」

「うーむ、少し気味が悪いな」

大作を始め何人かが、馬肉を喰った。大部分の者は、ぐうぐう鳴る腹を押えながら、頑固に、

——汚らわしい、獣の肉なぞ、

と、唾を吐いた。

馬肉騒ぎの一段落したところには、東の空が鉛色に変わり、つづいて灰色に薄らんできた。

「敵が——やってくる！」

見張りの兵が叫んだ。兵たちが一斉に、防柵にとりついた。

街道の彼方から、朝もやを衝いて、敵の兵たちが近づいてくる。筒袖の上衣にズボン、その上から帯をしめて刀を差し、草鞋をはいている。手にはミニエー銃を持っていた。二百メートルくらいまで迫ってくると、立ったまま、銃を発射した。

防柵にしていた畳の上部から首を出して覗いていた桑名兵の一人が、眉間を射ち貫かれ、悲鳴をあげて斃れた。

「顔を出すな、首を下げろ、もっと引き寄せてから撃て」

小隊長の飯田半兵衛が、叫んだ。味方の持っているゲーベル銃は、同じ距離で命中精度はミニエー銃の五分の一しかないのである。

——銃では敵わぬ、奴らに撃たすだけ撃たしておいて、斬り込むよりほかない。

二日間の戦闘が、そう訓えていた。

「よし、撃てッ」